

## 心理学教室激動の時代と 2012 年日本心理学会大会

山上 精次

### 心理学教室激動の時代

平成 4 年から 8 年まで

前号に引き続き、心理学教室の歴史的エピソードを紹介します。今号では平成 4 年 (1992 年) の大学院修士課程の設置から平成 8 年 (1996 年) までの文学部心理学科創立までのいわば激動の 4 年間について述べます。

大学院修士課程の設置 (平成 4 年)

ボクが入職した昭和 54 年以来、さまざまな機構改革の動きそのものは幾度もありました。人文学科内の各コースを学科化する構想や大学院の専攻を設置する構想などが何度も練られました。けれどもそれらの改革はその都度いろいろな理由で頓挫を繰り返していました。つまり、平成 4 年に至るまでは、ある意味で平穏で落ち着いた日々、別の側面から見れば改革の頓挫による挫折の日々が続いていました。この空気を打ち破ったのは、歴史学専攻の先生方を中心とする文学部人文学科の各コースの先生方でした。とりわけ、スバルタクスの乱などの研究で有名な土井正興先生は大学院の設置に文字通り心血を注がれました。土井先生をはじめとする多くの先生方のご尽力のおかげで平成 4 年に人文学科の各コースの上に修士課程が設置されました。心理学コース内でも、大学院心理学専攻の理念をどのようなものとするかについて長時間にわたって議論が交わされました。その結果、この生田の地に臨床心理学分野、情報処理心理学分野を主要な柱とした大学院を打ち立てようという理念が全員一致で確立されました。現在の 4 号館 4 階の実験室や実習室、研究室が増設されたのも、平成 4 年の大学院のスタートにあわせてのことでした。

博士過程の設置 (平成 6 年)

修士課程が設置されてから 2 年後の平成 6 年 (1994 年)、大学院博士課程が設置されました。これで大学院心理学専攻の教育の姿がようやく整ったことになりました。専修大学心理学教室の卒業生は、この時期までに既に大学で教鞭をとる人、研究者として研究現場で活躍する人などを 20 名近く輩出していましたが、それらの人たちは、学部は生田で学んではいるけれど、他大学の大学院に進学した方々でした。大学院博士課程設置を機

に、いよいよ生田の地で研究者を養成できることになり、専修大学の心理学をさらに盛り立てていく機運が高まつたと言えます。

文学部心理学科の創設 (平成 8 年)

長く人文学科内の 1 コースとして地力を蓄えてきた心理学コースは、平成 8 年 4 月から文学部心理学科として再出発しました。実に長い年月にわたる構想立案、頓挫の歴史のあと、やっとここに到達したというのがその場に居合わせた全ての先生方の感慨でした。文学部心理学科は 7 名の専任教員（金城先生、中谷先生、岡部先生、乾先生、東條先生、下斗米先生と山上）とでスタートしました。1 学年の学生定員は 50 名で、文字通りの少人数教育を実践できるこじんまりとした家庭的な雰囲気の学科でした。規模は小さいながらも、心理学科は情報施設の充実と臨床教育の充実などを柱とした総合的な心理学科として大きな理想をもってスタートしました。初代学科長となられた東條先生は、学科立ち上げの一一番大事な時期に、今日の心理学科の在りように関わる重要な方向性を定められました。心理学科の現在は、先生によってその礎が築かれたと言えます。しかし惜しくも東條先生は学科長 2 期を務められた後、平成 13 年に急逝されました。心理学教室に関わるすべての者がその大きな損失と悲しみに呆然自失としたことを昨日のことのように思い出します。

この後の人間科学部につながる改革については、次号に回すことにします。

### 2012 年日本心理学会専修大学大会

さて、話は未来へと飛躍します。2012 年 9 月 11 日 (火) から 13 日 (木) までの 3 日間の日程で、日本心理学会第 76 回大会が本学生田校舎において開催されます。

日本心理学会は、心理学の総合的な学会としては我が国ではもっとも規模が大きくかつ伝統のある学会で、1927 年に設立されてからおよそ 95 年になります。またアジア各国の心理学会関係者も多数参加される国際的な学会もあります。そのような学会を心理学科でお引き受けしたことは、学科としてはまことに名誉なことではありますが、反面、なかなかの大事業なので、学科の先



図1 日本心理学会大会第76回大会公式ポスター

生方全員、院生、学生のみなさんが、それからかつて本学心理学科に何らかの関わりをお持ちの全ての方々の総力を結集することが必要です。

さらに、日本心理学会大会は専修大学が過去130年の間に開催したあらゆる学問分野の学会の中で、かつて経験したことのない最大規模の学会ですので、専修大学全体にとってもチャレンジングなイベントです。したがって、学科の関係者のみならず法人も含めた専修大学の全てのパワーの結集が求められています。幸いなことに、日本心理学会の繁樹算夫前理事長から公式な大会開催依頼を頂戴した2010年の夏以来、専修大学の色々な部署の方々から厚い支援を頂いており、これまでの準備作業も全体としてはほぼ順調に進んでいるところです。

ところで、繁樹先生は、実は前節にご紹介した東條正城先生の大学時代、大学院時代以来のご親友でいらっしゃって、東條先生とは長くご家族ぐるみのお付き合いをなさっていました。大会の打診を頂戴した時も、またその後の幾度ものやりとりの中でも繁樹先生から何度も「東條さんのお導き」というお言葉をお聞きしました。実はこのお言葉は、2010年に先生のお弟子さんの岡田謙介先生が本学に専任講師として入職された時にもよくお使いになりました。重樹先生が何かと専修大学心理学科をお気遣いくださる背景には東條先生との強い縁があることを感じています。

さて9月11日の大会開催日まで最早あと半年ほどしかありません。しかし実は既に半年以上も前から招待講演でお呼びする外国からの著名研究者のリストアップと交渉、どんなタイトルのシンポジウムをどなたにお願いするかなどの準備は進んでいました。ご講演くださる予定の主だったお名前だけを紹介しておきますと、ミラーニューロンの発見者として有名で今号の榎本さんの論

文の大きなバックボーンになっているRizzolatti先生、臨床と基礎をつなぐ極めて重要な研究をなさっているPascual-Leone先生、それから精神科医の北山修先生などなど興味深い講演が多数予定されています。心理学科の学生院生諸君は、アルバイトとして大いに力を発揮していただきたいのですけれど、これらの講演も時間を工夫してぜひ聞くべきだと思います。一生の思い出になるでしょう。

ところで、日本心理学会大会は、その巨大さによって、これまでの主催校は基本的に前例を踏襲し、前回通りの大会を企画する他ありませんでした。また何度も大会を主催した大学でも、通常は10年以上の間隔を置いて担当します。そのために過去の経験と知識は既に消滅していて、どの主催校も枚かいほぼ初めての経験という状態で巨大学会の開催事業を行わなければならないという状況にあったわけです。

第76回専修大学大会は、日本心理学会の執行部=理事長と常務理事会から色々な指導を受けながら、いくつかの点でこれまでにない斬新で革新的な試みを導入します。初めて大会を開催する大学としては、冒険的とも言えるほどのレベルだと思います。以下に主なものを紹介しておきましょう。

まず最大のものは、長年の懸案であった発表の申込み時期と大会当日までの期間を短縮したことです。従来は、申込みをしてから大会までは7ヶ月ほどもあったのですが、第76大会ではこれを4ヶ月に短縮することにしました。この劇的な短縮が可能になったのは、郵便振込用紙による参加費の支払いを廃し、クレジットカードとコンビニ払いを採用したこと、それに伴い、従来の1号通信と2号通信を合併して、通信を1本のみとしたこと、ワープロ原稿から版下を作つて分厚い予稿集を何ヶ月もかけて印刷し全参加者に配布するのを廃止したことなどの無数の工夫がなされたことによります。さらに当日の会場では、スマートフォンを活用して、参加者が次に聞きに行くべき発表の発表時間が近づくとアラートを発し、場所を指示するようなアプリケーションを配布します。また夕方以降には宴会ができるお店の場所を地図で示したりもできます。

まだまだこの先、いろいろとトラブルや困難な問題が起こってくると思いますが、専修大学心理学教室の歴史に残る大事業を何としても成功させなければなりません。学生諸君にも卒業生諸君にも色々とお願いをしなければならなくなると思っています。その際には、どうぞよろしくお願いします。

(Received 2012年3月4日)